伊奈波神社の棟札と社殿

岐阜市歴史博物館学芸員　筧　真理子

去る三月、伊奈波神社から岐阜市歴史博物館に新たに御宝物をお預けいただきました。貞享二年（一六八五）の棟札（棟上げのときに工事の由緒や関係者などをしるして棟木に打ち付ける板）です。頭部は山形をなし、縦一〇六センチ、横一四センチ、厚さ二・六センチで、重さは約三・八キログラムもあります。釘跡や汚れなど全くない美しいヒノキの一枚板で、本殿の脇にある倉庫の奥から見つかりました。『伊奈波神社略誌』（昭和十六年発行）に銘文が掲載されているものの、これまで存在が確認できていませんでした。

表には上棟式が行われた「貞享二乙丑年夏四月十四日」の日付があり、「美濃国厚見郡因幡神社　尾濃国司正三位行中納言源朝臣光友公」と大きく書かれています。その下部には、神主の塩谷延満・社僧の満願寺心宮・平社家の塩谷越後という神社のメンバー、大工の小野権兵衛、岐阜町年寄の加島勘右衛門・加納久左衛門、最後に棟札の筆者として名古屋東照宮神主である吉見恒幸が名を連ねます。

裏には漢文の「美濃国厚見郡因幡神社上梁文」が細かくしるされますが、その内容を意訳すると次のようになります。

「神国の風俗は、上下の万民すべて神祇を崇尊しない者はない。そのため、神道の正しく直き道が世に行われ、国家は安らかで、いろいろな事物も神の理を離れることなく、まして人情の常として神の教えに漏れることはない。そもそも、当神社は人王十一代の垂仁天皇の第二の御子である五十瓊敷入彦命をお祀りしたものである。しかし今では社頭が破損してきたので、地元郡郷の氏子たちが造営料を寄進して新たに建立した。柱は高大で板も厚く広い神殿がもはや竣工し、工匠は仕事を終えて横木を手放し、社人は喜びをささげ、誠に人々の信心を汲み取る霊神の感応もいや増した。今、遷宮の儀式をとのえ、宮殿廊閣はめでたい縄で結界をし、山上山下には二面に篝火をたき、神聖な竹で四手を製し、内陣には神器を飾り、外陣には幣物をささげて、遠近の神職らが集まって祝詞を献ずる。」

このあとに、美しい景観の中にあって誰もが仰ぐ神社の威風と、岐阜町のにぎわい、新社殿の竣工などを詠んだ漢詩、さらに続けて「伏して願わくは、上棟ののち神徳がますます現れ、神光が災厄を払わんこと、君臣平民皆がその霊験をこうむり、当家の武運が栄え、国家安全であらんことを。理想の世である十世紀の延喜・天暦の治の時代のように、神の感応により人々に幸いがあらんことを」と結んでいます。

伊奈波神社の社殿は、天正十一年（一五八三）に岐阜城主の織田信孝が羽柴秀吉と対立した戦いで焼失し、再興されたと伝えます。延宝八年（一六八〇）には宮殿・廻廊・門・拝殿などを再造営しましたが、これは修復と思われます。天和二年（一六八二）の覚え書きには、三間四面（約五・四メートル四方）の本殿、五間×三間の拝殿を初め、末社二十一社・鐘楼堂・薬師堂などの建物があったことがしるされています。こののち、建物の傷みが進んだため、貞享二年の大造営と遷宮の運びとなったのです。

このときには第二代尾張藩主の徳川光友が造営を行い、名古屋東照宮神主の吉見幸和に神事一切を奉行させたと『伊奈波神社略誌』はしるしています。吉見幸和は儒学・有職故実にも通じ、多くの著作も残した著名な神道学者です。しかし、貞享二年にはまだ十二歳でしたから、この記述をそのまま信じることはできないでしょう。事実、棟札に名前があるのは幸和の父である恒幸で、このころには恒幸が東照宮神主でした。また徳川光友は神仏への崇敬が厚く、名古屋の建中寺を初め多くの寺社の造営を行い、藩財政を圧迫したほどであったといわれます。棟札にも最も大きく名があり、伊奈波社殿造営に関与したことは確かでしょう。しかし、裏面の文章からは光友が全ての造営費を出したのではなく、氏子である岐阜町周辺の人たちの尽力が大きかったことが読みとれます。領主の尾張藩主にだけ頼ったのではなく、地元の人々が力をあげて実現させたのが貞享の造営だったといえるでしょう。

棟札に名前がある加納家・加島（賀島）家は織田信長以来の由緒をもち、藩主にも御目見得が許される家柄でした。肩書きは「岐阜町年寄」となっていますが、「岐阜惣年寄」としている史料もあります。このころの岐阜町には、尾張藩から派遣された町政担当者は常駐していませんでした。米屋町などの各町には年寄・組頭が置かれ、町政はこれら町民の自治に任せられていたと思われます。加納家・賀島家は各町の年寄らを束ねる惣年寄であったと伝えますが、実は十七世紀の史料のうち、両家が岐阜町の代表者であることを確認できる唯一のものがこの棟札なのです。

博物館には、この他にも三枚の棟札をお預かりしています。一枚は同じく貞享二年のものですが、文字は年月日と「岐阜因幡神社棟札　塩谷土佐守県延満」とあるのみです。あるいは副本として作られたものでしょうか。あと二枚は、宝永四年（一七〇七）と寛延元年（一七四八）に社殿の屋根を葺きかえて正遷宮を挙行したときのものです。ここには、岐阜町人として「岐阜惣年寄」の二名に加えて「六役」という肩書きの人物が名を連ねています。これは元禄八年（一六九五）に岐阜奉行が創設されてのちに設けられた役職で、惣年寄の補佐役として町政を担いました。伊奈波神社の棟札は社殿の造営を示すだけでなく、惣年寄や六役という町政の役職名・在職者を確認できる、岐阜町にとっても重要な遺品です。

これら棟札にしるされた以外に、正徳元年（一七一一）九月の夜に「岐阜山（金華山）が激しく震動して、山中の鳥獣が啼き騒ぐ声がまるで人間のように聞こえ、その後に拝殿の天井から火が燃え出たが、人びとが集まって消火した。真中だけが焼け、四方は残った」という記事が尾張藩士の日記にしるされています。同じ事件は、岐阜町について十八世紀半ばに尾張藩士がまとめた記録『岐阜志略』にも「稲葉山が鳴動し、鹿や猪などが町中にまで逃げ出した。その夜、拝殿が焼失した」と書かれています。一体何が起こったのかはっきりしませんが、このとき焼けた拝殿は二十年後の享保十六年（一七三一）に復旧しました。

こののちは岐阜町に大火があっても神社は無事で明治維新を迎えますが、明治二十四年（一八九一）の濃尾震災で神輿庫以外は全て焼失してしまいます。社殿が面目を一新して復興されたのは明治三十年のことでした。徳川光友と岐阜町人の力で貞享二年に造営された社殿のようすを現在でも偲ぶことができるのは、大鳥居脇に建つ神輿庫だけです。

棟札 表面

棟札 裏面

19世紀中ごろの社殿